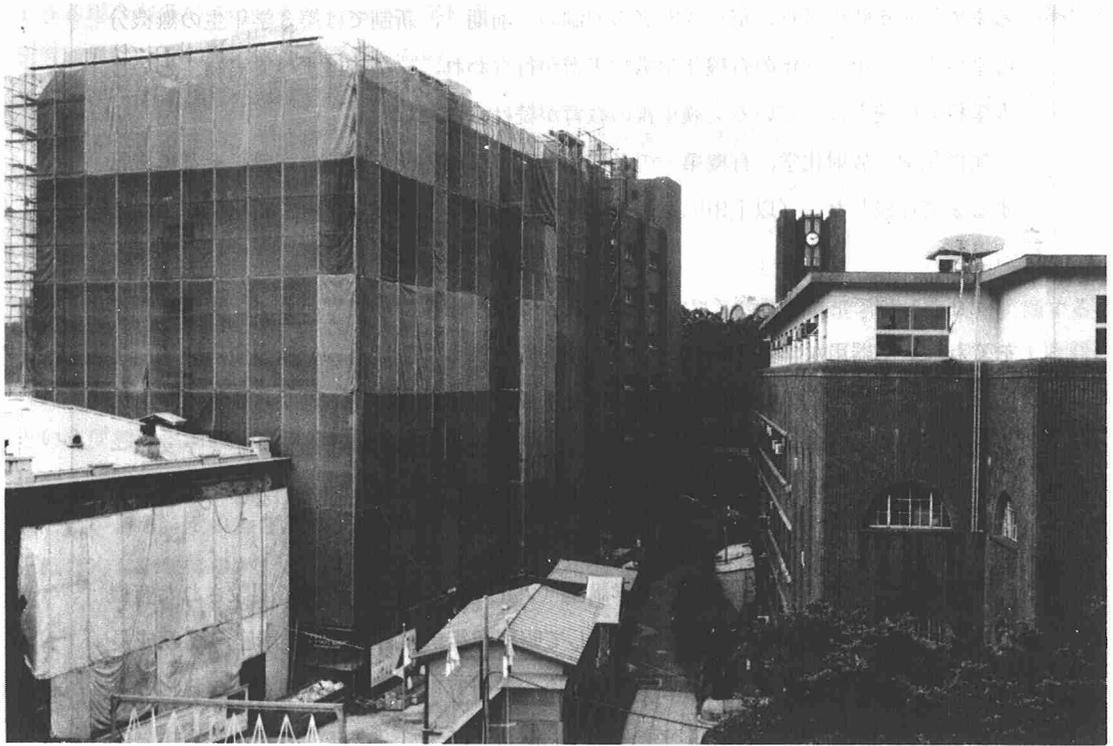


廣報

東京大学理学部



目次

表紙の説明	1
コロンブスの卵	福島 直 2
禁酒バケツ	岩澤 康裕 3
国際交流室から	守 隆夫 4
セミ雑感	牧島 一夫 5
〈学部消息〉	7

表紙の説明

建築中の理学部D棟（仮称）

昭和61年11月完成予定で、主として情報科学科が使用する予定。

この場所には大正12年以来今回の取り壊しまで化学の昔は“新館”と呼ばれた旧館北棟があった。昭和37年化学新館（現在の本館）が完成、学生実験室がそこに移転するまで約40年間に亘り、毎年約25名の旧制の“前期”，新制では第3学年生の無機分析学生実験，第4学年の有機化学実験実習が行なわれ，“午後はすべて実験”という本学科の伝統となっている実験重視の教育が続けられた。

無機化学，放射化学，有機第一の各講座研究室は昭和58年新館が完成，そこに移転するまで存続した。（以上田隅三生編 東京大学理学部化学科小史・昭和60年 による。）

現在第一線で活躍中の多くの化学者にとって思い出深い建物であるが，実験重視にそぐわない不器用な学生やスポーツに時間を取られる学生にとっては大変辛い場所であった。卒業後，理論物理の教授になったT氏の記憶は液体をろ過する時，ロートの下にビーカーを入れることを何時も忘れて怒られた事であり，日本アマチュアスポーツのボスとして活躍されたM氏には“今後一生，化学はやりません”という一札を入れてやっと卒業させてもらったという伝説がある。

戦後，生物化学に発展した生物化学講座（大正末期），終戦直前に開設された有機合成講座，“ビキニの灰事件”を契機として昭和32年新設の放射化学講座，高度成長期に新設された無機合成，有機関係の新講座の各研究室が発足したのもこの建物であった。

合成講座，昭和32年新設の放射化学講座，高度成長期に新設された無機合成，有機関係の新講座の各研究室が発足したのもこの建物であった。

この場所は18～19世紀には加賀藩の役付き，単身赴任の藩士達の長大な長屋があった。また，遺跡調査の結果ここには弥生時代の遺跡は無いが，一種の落し穴である“壕”が発見され，縄文時代の狩り場であった事がわかった。

佐佐木 行 美